

## 和辻哲郎の仏教研究における自我論について

栗山はるな（京都大学）

本発表は和辻哲郎の仏教研究における自我論について概説し、またその和辻倫理学との関わりについて考察を行うものである。和辻哲郎は『倫理学』以前に多くの仏教研究を為しており、それらの業績からは「否定の運動」や「空」といった倫理学にも現れる用語の原型を見て取ることができる。発表者はその中から和辻による仏教的自我論の分析を通して和辻の認識論を明らかにし、その精緻化を通して和辻倫理学の理解に資することを目的とする。和辻哲郎は主に『原始仏教の実践哲学』、「法の概念と空の弁証法」等において仏教的自我論について著述しており、その主な論点は以下の通りである。

第一に、そもそも仏教は自我を否定しており、時間的に継続して存在するものとしてはそれを認めない。一方で、種々の感覚があるということは否定しないため、自我もまた、あたかもそれがある様に感じられる仮構としてのみ認められる。自己の感じる苦しみからの離脱を目指す仏教思想においては、その主語たる自我の継続性を否定することはその思想的最重要点の一つであった。

第二に、自我が無いにも関わらず感覚が「ある」ということは和辻によってどのように理解されたか。曰く、自我を否定する仏教の立場では、主体である自我が感覚で客体を知る、という図式を取らない。そのため、特にアビダルマ仏教においては主語を設定せずただ幾多の感覚刺激が「感じられる」ということのみを認め、ただそれらの感覚の種類分けを試みる。五蘊や六処に代表される仏教的カテゴリーは法と呼ばれ、法の体系から自我の感覚も分類される。

第三に、それではなぜ「自我がある」と述べてはいけないのか。時間的に継続する確固たるものとしては実在しないが仮構としてのみある、というのはいかなるあり方なのか。アビダルマのその後の展開では、分けられた法を時間的に継続する存在と認める立場が法を確固たる実在と見る立場を導き、そこからは自我もまた確固たるものとして認められ得る和辻は批判する。そしてその陥穽を避けるために、和辻は法があくまで分けられたものとしてのみあるということに注目する。全ての法は他の法から分かれたことによるのみ存在する、つまり論理的関係性においてのみあるという意味で自足的存在ではない仮構であると和辻は考えるのである。この立場においては、主観もまた関係性の中から相対的な形で析出するものであるため、時間的に継続する確固たるものとしてはそれを否定される。

なお、ここで和辻は論理的関係性から個々の法を析出させ、また埋没させる意識の働きを「否定の運動」と呼び、またその仮構的な存在のあり方を「空」と呼ぶ。それらの概念が和辻の倫理学著作においても見られることは上記したが、このような立場は和辻の倫理学著作においても認められるであろうか。和辻は『倫理学』冒頭において孤立的自我としての個人の立場を認めないと述べるが、その一方で間柄の関係構造から否定されて生まれるものとしては個人の存在を認めている。仏教論においてカテゴリーの論理的関係性の中から相対的に析出するものとされた自我は、倫理学においては人間の間柄的關係性、行為的連関構造の中から析出するものであると読み替えられたと考えることができるのである。